

Title	集落の自然的条件について
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1927
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.21, No.9 (1927. 9) ,p.1264(154)- 1276(166)
JaLC DOI	10.14991/001.19270901-0154
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19270901-0154

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

聚落の自然的條件について

奥井復太郎

自然は人類のあらゆる生活の基礎であり、其の勢力の及ぼす影響は極めて著しい。人が其の生存上土地に依繫すると云ふ眞理以外に人類の聚落生活が如何に土地の情況に左右されるかと云ふ事を観察すると大體二方面に分ける事が出来る。第一に土地の地方的性質は其の地の住民の生活内容を規定する、山地又は沿海の諸住民は其の生活の形式が居住すべく定められた地の自然的情況によつて影響されてゐる、殊に原始未開の時代かゝる自然的勢力の作用は最も著しかった。漁獵民族狩獵民族牧畜民族農耕民族等の生活形式の差別は正に自然的作用の結果である。第二の方面はかく地理的に分布された状態の上に、更に一定地點の自然的特質が住民の聚落形成に作用して来る。山地沿海森林平野、如何なる土地にあつても、居住民は其の生活上最も有利なる可き地を其の土地の性質の中に求めて居を卜する。河川湖沼海灣の流域又は沿岸、森林の縁邊、平地高原中の丘阜のある所等は唯單に人類の生存するに好適な場所と云ふ意味に於いても先づ第一に撰擇される點であつた。廣大なる平原沃野、之れを貫流する大河、其處に起伏する丘陵、近く海の迫るものあれば、是等四

つの條件は古來より大都市發達の根本的自然條件であつた、北獨逸沿海の諸市はいづれもかゝる自然的條件を具備してゐた、唯かゝる條件は餘りに一般的であり、聚落形成の自然的原因たるも、其の發展的要素としては更に他に求める所がなければならぬ、此の點は後段に説く。

上記二方面の自然的影響の中、第一に屬するものはこゝに説明しない唯前述の歴史的民族生存形式の相違の外に産業の自然的地方的分布と云ふ事も加へられねばならぬ、殊に産業の性質が土地の特産物の抽出にある場合は、かゝる土地の性質が特殊の聚落形成の重大原因となる、後述するが如く、例へば獨逸中部の山岳地方の外側には鑛業の發達を基礎とする多くの都市の發生發展が許されてゐる。是等は自然的條件の中にも最も特殊なものである。

第二の方面は大體に於いて一般的條件とも稱す可きものである、水陸、高低、寒熱冷暑の地理的情況よりも一特定地域の自然的形勢の及ぼす影響の方が一聚落の形式にとつては遙かに重要なものである。即ち如何なる土地に於いても聚落地發生について共通なのは水源の存在である、従つて泉又は川流又は湖沼の附近は聚落生活の最も早く着目する地點である、更に土地乾燥の度である、河川の流域沼澤地にあつては水害に對する用意の必要上と、部落の外敵に對する防衛の必要上から屢山腹丘陵高臺の一點に土地を撰擇する、獨逸首府柏林市の前身はスラブ民族の一漁村であつた、今アルト・ケェルンと稱する地は今日のブランデンブルク平原中エルベ河支流スプレエ河畔に臨み低いながらも其處に起伏する小丘の上に營なまれた聚落であつた、アルトベルリンもこの漁村にすぐ近接して同じ地理的條件を撰んで建設されたものである。故に聚落形成の場合に唯單に其の聚落を

孤立的状態に於いて考へるも水源と高臺とは主要の自然的要件であつた、同時に又風向き並びに日光の方角等も細心なる聚落民のよく注意する所である。森林草原沃地等農耕牧畜上の必要條件は過去の聚落にあつては心ずしも重大な要件ではなかつた、唯相當の面積の農耕地が存在すれば原始的な小規模の聚落を維持する事はさしたる困難でなかつた。

以上は聚落の自然的條件の一般論である、がこゝに聚落の目的と云ふ事を考へる必要がある。何故其の地を撰んで聚落が行はれるか、蓋し目的の在る所には知識の範圍内に於いて取捨決定の撰擇が行はれる。太古の聚落部落には特殊の目的がなかつた。部落民が最も有利なる生存方法を講じ得ればそれでいゝのである。しかも彼等の地理的知識は極めて限られてゐる、故に往々にして彼等には撰擇の餘地が與へられない事があり或は與へられたとしても極めて狭い範圍内に於いてゐる。勿論彼等と雖も一定の土地から他の土地に有利なる條件を求めて移るものであるのを否定する事は出来ない、これに附隨してかゝる原始的な居住形式は勿論其の規模が小さく殆ど全く交通と云ふものは存在してゐない、故に彼等は單なる生存上の必要を土地に求める以外何等目的を持つてゐない。

之れと同列に取扱ひうるや否やは疑問であるが、特殊の目的を有せず聚落の一般的自然的條件を求めたものに紀元第十二、三世紀に於ける獨逸東方植民がある。民族大移動後エルベ河以東ザール河以北の地方は以前ゲルマン民族の發生地であるがスラブ民族の占むる所となつた。第十一、二世紀に於ける西南獨逸の發展は再び是等東北部地方にゲルマニシールンクを行ふ機運を生んだ、この趨勢の中にこれ等スラブランドに新しく建設された都市所謂植民都市なるものは百を以つて數ふる

程大多數に上つたが、其の建設地は殆ど悉く新しい土地が撰定されたのである、即ち是等の都市は文字通りの建設都市である、が然かも大多數の建設地點は既にスラブ民族の部落の存在せる地點であり、獨逸植民者は常に彼等先住民族とや、離れて居住したのである。前述伯林市發生に於けるアルト・ケルン對アルト・ベルリンの如きは其の例である。其の土地の撰擇に當り即ち邊境の故を以つて外敵に對する要害は充分に考慮せらるゝと共に低地地方なるが故に水害に對する關係も顧みられた。勿論この當時既に西南獨逸本國との交通は稍盛んであつた故に交通上の便益が觀考されねばならなかつた。重要な交通路の交叉河川航行の可否は西南獨逸に於いて都市發展の源が交通の便益に依繋する事を知つた植民者の當然注目する所であつた。がなほ是等の時代の都市は云はゞ封鎖的な純地方的獨立的存在を可能ならしめる爲めに其の孤立的關係に於いて聚落の自然的條件に對する交渉は原始的な部落構成の形式と異なる所がなかつた、従つて上に述べた様に新設都市の建設地が聚落の一般的自然的條件に於いてスラブ民族の居住地と一致してゐる事は毫も不思議はない、更に是等數百に達する植民都市の後世交通發達の時代に於ける運命が皆一樣でない事によつても如何に當時の建設方法は孤立的存在の可能性を以つて主たる目的としたか窺はれる。

以上觀察した所は一般の聚落に對する自然的條件の一般的なるものである。が聚落の目的に言及したる以上吾々は聚落のあるものに就いては特殊目的の存在するものを求めねばならぬ。この特殊的目的を判然と示すものは軍事的必要より發する攻防施設の地點である、こは特殊の目的に従つて特殊の地點を撰擇するのである、自然的條件が其の地の撰擇の上に強く働く事は丁度土地の特殊的

産物によつて特殊な都市(前述せる工業都市の如き)發生を促すと其の特殊性に於いて同一關係に立つ、唯この土地の特殊の形状は特殊の目的の存在するを挨つて意義あるものであるを忘れてはならない。一般的な聚落や前記獨逸植民都市に於いても外敵に備ふる必要上一應は防衛に便なる地點が撰擇される、この際等しく河川湖沼森林山岳等は軍事的目的にも適ふ條件である、たゞこの目的に最もよく適する自然的條件を求めらば吾々は獨逸國內に無數に存在するブルクの存在地を知るがい、其は支配者の居城たると同時に軍事上の城塞であつて、平原高地又は河川流域を廣く眼下に支配する山嶺崖上に建設されてゐる、ライン沿岸に残る無數の城跡はこの種のものである。

之を要するに自然的條件は聚落當事者の撰擇即ち知識と目的と云ふ人的要件と相俟つて働くものである。自然的條件が果して優先的に人的要件に先行して働くや否やは明言し難い、何となれば聚落地の撰擇は結果に於いて有るが儘の自然的條件をそのままに受け入れなければならぬからである、又換言すれば一度一定地點に聚落形成が決定せらるれば其の形式は其地の自然的條件に依據しなければならぬからである。唯聚落形成は其の地の自然的條件が規定するが其の自然的條件は聚落住民の目的の撰擇するをまつ、従つて間接には聚落形成は目的によつて決定して來ると云つて差支ない。

二

聚落の目的と云ふ事を論ずれば吾々はこゝに可變的な關係を認めなければならなくなつて來る。この可變的關係こそ吾々が最も注意せねばならぬ點である、以下聊か之れを詳説し様。

聚落と其の生活内容を發展的に見るならば(一)聚落の封鎖孤立的な生活形式——即ち原始的聚落形式(二)交通交易によつて成立する聚落の生活形式の兩者に區別する事が出来る。第一のものには一般生活上の必要以外に「攻防の便益」と云ふ目的が入つて來る、第二のものには之れが漸次失はれて「交通の便益」と云ふものが入つて來る、——この關係は即ち社會の動的關係であり可變的關係と稱するものであり、この變化が聚落の形成發達に及ぼす影響はむしろ著しいものがある。

ゲルト、リタウエル民族の孤立的な生活に對してゲルマン民族は早くから村落生活(ドルフ)を營んでゐたがゲルマン民族にとつて都會生活は羅馬帝國末期以前は全然未知のものであつた、彼等が最初に知つた都會生活はライン、ドナウの沿岸に羅馬人の建設した所謂羅馬都市のみであつた、當時の獨逸は全く森林草野の地方で僅か河川の流域に小丘に據つた地點を求め小規模な部落が簡単な農耕と牧畜とを營んでゐたに過ぎない。是等の部落は賢明にもよく其の地を撰んで建設された、水邊の高地は前述せるが如くに外敵又は水害の不幸に對する保護を致した又よく風向ならびに日光の關係を顧慮して聚落の方向を決定した、一部落の中最も重要な地點は部落民が傳習として其の社會生活を行ふ一種の公共的中心地即ち裁判行政祭祀宴樂等諸種の全部落的集會の行はれる地點(Mingplatz)で一般に他より一層高い地點の廣場を撰んで地を下する、この地は後世フランク又ザクセン民族の基督教に歸依した際には例外なく教會堂の敷地となり更に之れに附隨してマルクト(市場)廣場として利用されたものである。この廣場は村落が密集してゐる時は略々其の部落の中心にあるか、又聚落の形式が散在せる各戸又は少數の戸數の集合よりなる時はこの廣場を中心として幾多の道路が作

られる。この形式はディングフラッツが後世マルクトフラッツとして又はドームフラッツとして聚落殊に都會生活の中心となつた變遷を多くの歴史的な都市が其の地圖の上に示してゐる。

このゲルマン民族の聚落生活は當然小規模な外部とは交渉のない形式である、彼等の中にあつて外部との交通はさうであつたか、彼等の各部落間の交通路は今日山間僻地の村落を連絡する通路と大差ない、徒歩又は馬を驅るか又は簡単な手押車の通ふ道がその全部であつた、又部落の相互の距離が隔つてゐる爲め、且つ日常生活には殆ど交渉の必要のない爲めかゝる外部との交通路は戦時又はフンデルトシャフテンとかの集合の場合を除く外絶対に利用されなかつたと云つていい。是等交通路は勿論自然的條件に服してゐる、河川の流又は土地地勢の方向に従つて、且つ高い山岳の通路を避ける場合にはその山脈の兩側に盆地低地が相迫つてきて所謂峠を形成する地點を撰んで之れを越える。反對に低地平原では殊に沼澤地方では最も高い地點を結ぶ丘岡の上を走る乾燥した街道が造られる、そのいづれにもせよ共通な點は、所定の部落間を最短距離最短時間で結ぶ通路が撰擇せられる事である。

之れに比較するとライン流域に於ける羅馬植民地定住の規模並びに形式計畫は堂々たるものであつた所謂羅馬都市と稱せられるもの又羅馬街道と稱せられるものは當時に於いて完備してゐた許りでなく共に後世に永く利用され、又羅馬都市と稱せらるゝケルン、マインツ、アウグスブルク、レーゲンスブルク等の諸市は羅馬文化と直接の交渉の無いにして、ゲルマン民族の文化的發展の中に再び都市生活の隆盛を來した點をみても如何に羅馬人の聚落形成の知識が卓拔であつたかを語つてゐる。(この所謂羅馬都市が中世獨逸文化の中に再び榮えたのは、是等地方が羅馬帝國の時代から連絡を有してゐた伊太利との交通關係を其儘持續し得たからと思ふ、この意味に於いても交通の都市發達に對する意義は大である)。

茲に於いて吾々は都市發生又は發展の直接的な主要原因である交通關係に轉ずる。前記のスラブ民族や又ゲルマン民族の初期の聚落は屢々後世都市發達の地となつたが其は極めて偶然のものであつて、聚落當初に勿論かゝる先見で存在したものでない、この事は十二世紀の植民都市についても云ひうる、彼等の建設に當つては可なり交通の便宜が考慮されその點よりする後世の發展の可能性を期待したとは云へ數百の植民都市中其の期待を失ふて大都市に發展したものは僅少である、之れ即ち社會的條件の變化が決定的に作用してゐる結果であり、交通發達の關係に於いて惠まれたものゝみが其の發展を許されたのである。

ゲルマン民族の部落間の交通路の發達してゐなかつたのは前記の如くであるが羅馬人によつて侵略を蒙つた邊境方面は羅馬人自身の施設又は彼等より傳承したフランク民族の道路技術は可なり進歩して來た、是等の交通路は前述の羅馬街道や、獨逸西部から東方又は北部沿海地方の聚落地を連絡するものであり、其の性質は是等地方の産業的開拓にあると共に主としてフランク王國の對スラブ民族の政策による軍事的必要にあつた。

この種の遠隔な重要通路の主要なるものが二つある、一つは佛蘭西巴里よりアルデンネンの北邊ライン高地に沿ふてライン河畔の大都市ケルンに至り更にマインツを経て東方に向ふもの、更に

この地からは北方沿海地方に向ふ通路も存在した。第二はドナウ沿岸ウッセンを過ぎレーゲスブルクを経て北方に向ふもの、共にオストゼー沿海地方、ゴート、ランゴバルト、シュウエーベン、ヴェンデル等の諸民族の發生地、エルベ川よりワイクセル川に及ぶ地方に達するものである。殊にウッセンは地中海の雄市ヴェニスとオストゼーの琥珀産地とを結ぶ線の重要な中心地であり、ケェルンは佛蘭西巴里より來る道路と南方ローヌ河谿谷を経てライン河に沿ふて西北上する伊太利よりの交通路の獨逸に入る關門の交叉點であり後にはハムブルク、リュールベック、ブレーメンによつて代表される北獨逸の大都市を連絡し且つ上述の遙が東方に通ずる交通路の出發點でもあつたのである、この東北獨逸とケェルン、ウッセンを結ぶ二大交通路はこの地方の民族が西羅馬帝國を襲ふに當つても逆に利用されたものであつた。この二大通路に集まる他の道路としては、中部歐羅巴の大河川の谿谷に沿ふて東又は北に走るもの、獨逸中部の山岳地方では今日なほ山岳貫通の鐵道線として利用されてゐる峠道等がある。

是等の諸道路が相互に又前記の二大主要交通路と相交る地點には當然市場都市の發達する可能性が與へられた。そして是等の地方に小規模にせよ多數の部落が比較的稠密に散在してゐる場合を假定すると是等要路の交叉點又は其の極く近傍には既に以前から何等かの聚落の存在した事を推測しうる。又反對に人跡稀れな地點に於いてかゝる街頭が交叉するならば其地點に旅行道中に關する諸施設として聚落の發生を促す事がある。之れを前記の原始的聚落と相對して考へてみれば、彼等が文明地方(即ち西南獨逸)に近かければ近い丈彼等内部並びに外部との交渉は漸次盛んになつて行つた者と思ふ事が出来る、この發達に伴つて特に重要な交通路が相互的に生れて來る、又文明地方と隔絶してゐる地方でも是等内部の擴大と相合して外界からの交通が文明地方の開拓者を先達として漸次開かれて來る、其の交通路の撰擇方法は村落民のそれと異なる所がない、常に自然的障害の少ない線を撰んで交通路は開ける、かくして主として河川の流域に従つて通路更に之れを横に連絡する通路の交通網が成立する、初期の聚落地は新しい開拓の足だまりとなる。

この初期の交通路發達の時代にあつては交叉點の意義は大部分街道の重要さと其の土地に依繫する、土地の形勢殊に旅客の收容其他交通運輸の安全と便宜とについての土地の保護條件が大なれば大なる程其の土地は確實な永續的な交通要衝となり、従つて居住來住の人口の増加につれ一つのマルクトとなり更にマルクトツードルンクとしての意義が擴大すれば天然の防衛條件以外に人爲的な施設によつて防衛を嚴かにする必要又は資格を生じ、かくして中世紀の意味に於ける都市が成立する。こゝで再び聚落の軍事的條件と云ふ事を考へねばならぬ。

元來聚落の目的が純軍事上の必要にある時は前述の様に特殊な地勢を持つた土地が撰ばれる、初期の聚落、中世都市にあつては聚落の目的は別個なものであつても軍事上の條件を具備する事が可なり重要な役目を演じてゐた、丘陵河川等は自然的要害の一部であつたが吾々は都市發達の直接原因である交通と軍事上の要害とは其の極端に於いては常に兩立するものでない事を知る、故に中世都市の發達を見ると漸次山間山腹の僻地の小都市は平原低地に發生し發達して行くに都市に凌駕されて行く傾向がある、この傾向の最も顯著なのは都市の自守的防備が全然不必要になつた近世都市

に現はれる。が中世紀には未だ都市の自守的防衛が必要であつた。こゝで一言注意しておくのはこの時代の都市の防備は自己的のものであつて其の以外の軍事的目的には比較的關係が少ないと云ふ事である、即ち中世都市にとつて其の城廓は缺く可からざるものであつたが、之れは都市聚落の目的が軍事的必要にあると云ふ意味ではない、都市の攻防設備は當時の國家的不秩序極端なる地方分權の時代にあつて、其時代の經濟的中心として富力の優れた都市自體を守る爲めに必要となつたものであつて、其の關係では軍事的必要より交通交易の關係上便宜の地點が撰ばれたのである、勿論最初は軍事的必要より發した聚落が後の經濟發達の傾向に合致して都市となつた例も少くはない、が獨逸の都市にブルクなる語尾を有する名稱が多いからと云つて直に是等の都市が城塞から發達したものと見る事は出来ない、要するに中世都市の防備は都市自體の防備であり其の發達條件は主として交易發達の目的に添ふ點にあつたのを考へねばならぬ。こゝに於いて中世都市では交通の便宜と攻防の利害とが一つの妥協を示してゐる、即ち中世大都市は平地の中に成立したゞ僅かに丘阜河川を以つて自然的防備とする代りに人力的防備即ちかの堂々たる城壁を以つて自然的條件の不備を補ふに至つたのである。この關係からして各聚落地點は各々其の盛衰を異にして來る、初期の防備要害に恵まれ過ぎたが爲めに後の交通發達時代の氣運に隨從する事が出来なかつたものもあれば、反對に土地の自然的保護條件は微々たるものであつても、聚落に於ける保護防衛の必要が緊切でなくなると共に交通上の要衝として大發達を許されるものもある。

この關係からして中世都市の大なるものは主として交通上の利益を重要視した位地にある、かくして特殊的目的による自然條件よりも中部北部に廣大な平原をひかへる獨逸に於いては一般的な聚落の條件の方が交通時代の聚落を影響するに有力となつた。勿論土地の特殊産物を忘れてはならない、交通交易の發達は地方的産業的發展を前提とするものであるからしてこの方面に於ける自然的條件を無視するのは大なる誤りである、前述した獨逸中部山岳地方が其の外邊に幾多に多くの近代的都市を生み出したが、この中央山岳地方の外縁にあたる地方、北部獨逸の低地と相交る地方である其中最も重要なものとしてラインプロヴィンツ、ウェストファーレン、ハノヴァー、ザクセン、オヴァー・シュレジエン等は世界的に著名な産業地域であり、デュッセルドルフ(四三〇九六)エルバートフェルド・バルメン(一六七〇二二五六)ハム(四九七七七)デュッセルドルフ(四三〇九六)エルバートフェルド・バルメン(一六七〇二五、一八七二九九)ゾリンゲン(五二〇〇二)レムシャイド(七六六七八)イゼルロートン(三〇九一五)ピールハイム(一二七一九五)エッセン(四六八六九六)ボックム(一五六七六二)ドルトムント(三二二〇二)レフエルト(八六〇〇〇)ミンデン(二七、三四)等は其の工業的特殊事情を缺けば純然たる地方的小市で留まる可きであつたらう。(括弧内は一九二五年の人口統計)故に山脈地方高原地方等の比較的僻地では自然の及ぼす地勢的影響が大であるのに對して近代の大都市平原沃野の内に存立する大都市についてみると自然の作用は大部分一般のであつて産業の地理的分布によるものを除けばあまり特殊でない、寧ろ政治的經濟的發達と云ふ事の方が(其の基礎には再び自然の作用が含まれてゐても)聚落としての都市の形成又は發展を左右するに遙かに緊切である。中世ハンザの諸都市アウグスブルク、レーゲンスブルク、ニュルンベルクなほ和蘭白耳義等の雄大なる諸都市は伊太利や英

國露西亞北歐洲諸國との交通關係を考へなければ理解すべからぬ存在ではなからうか。
 要略すれば聚落の發生形體は其のはじめに於いては自然的條件に負ふ所が多い、しかし時代の経過と共に人類の知識の増加生活内容並びに形式が變化するに従つて文化的條件は聚落形式に對して強く働くに至つた、こゝに於いて全然自然的條件の支配を脱したとは云へぬが、新しき形式の聚落形式に當つては異つた見地の自然的條件が生ずる、同一の自然的條件は成長的能力を持つ、又は可變的な聚落團に對して常に同一の作用を間斷なく及ぼすとしても、聚落其のものは之れを常に同じ利害關係に於いて受け入れる事は出来ない、一自然的狀態は聚落の生長に對して或ひは恩惠的であり或ひは破壊的である。換言すれば時代の變遷に従つて聚落形成に必要な自然要件は異つて來る、自然的影響の大なるは認めるが吾々の立場としては其の條件の内容を動かす勢力を忘れてはならぬのである。(完)

(昭和三年八月稿)

前號 (第二十一卷) 目次

●物價の月次的變動 高城仙次郎

●“Piers the Plowman”を通じて 野村兼太郎

見たる英國社會狀態

●唯物史觀批評 平井 新

●理財學會記事

●一冊定價金五拾錢 郵税金壹錢五厘
 ●一ヶ年分金貳圓九拾錢 郵 稅 共
 ●一ヶ年分金五圓四拾錢

●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
 ●營業に關する用件は發賣元宛
 ●原稿締切期日は發行の前月十日限

昭和二年八月卅一日印刷納本 每月一回一日發行
 昭和二年九月一日發行

三田學會雜誌 第二十一卷 第九號
 編輯者 江田 範 保
 發行所 東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾内
 印刷者 金子 鐵 五 郎
 印刷所 東京市赤坂區新町五丁目四十二番地 金子活版所

發賣元 丸善株式會社三田出張所
 東京市芝區三田貳丁目壹番地
 電話高輪 一九二六
 尚ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す
 發行所 東京芝三田 慶應義塾内 理財學會